



紀平真理子のオランダ通信

第24回

天敵昆虫の普及には きめ細かい アドバイスがカギ

プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

昨年行なわれたITTE（国際花き展示会）でKOPPERT社とbiobest社のブースを訪ね、天敵昆虫について話を聞いた。

オランダ・KOPPERT社の国際営業担当者によると、日本での同社製品の販売は1991年にアリストライフサイエンス社と販売契約を締結して以来20年以上経つという。日本市場への年間輸出額は約1000万ユーロに上る。ただ、諸事情から満足しているわけではなさそうだ。

「日本市場は天敵昆虫の登録にとにかく時間と費用がかかる。一番初めに登録したものは4年もかかった。いまは早ければ3年で申請が受理されるようになったが、最近でも生態系を壊すという理由で通らなかったケースがあった」

担当者は続けて両国の状況を説明してくれた。

「日本では施設園芸農家の約30〜40%が天敵昆虫を採用している。一方、オランダでは100%なんらかの天敵昆虫やマルハナバチを使用しており、バラ栽培でも90%と高い。これにはさまざまな要因が考えられる。まず購入コストが異なり、オランダでのバラ栽培では1㎡当たり1ユーロ以下なのに対して、日本では2〜3ユーロかかる。また、国土が九州ほどのオランダでは当社のコ

ンサルタント40人が週に一度、生産者を訪問して天敵昆虫の使用に関してアドバイスを行なえるが、国土面積の広い日本では難しいのではないかと。さらに、日本ではエネルギー価格が高いほか、冷暖房の調整不足で天敵昆虫が活動できない温度帯になつてうまく機能しないケースや、コスト面から十分な数の天敵昆虫を使用していないケースが多く見受けられる」

次に紹介するベルギー・biobest社は、主にヨーロッパやカナダで現地の販売代理店を通じてモロッコ産のマルハナバチと天敵昆虫を販売している会社だ。技術担当者によると、きめ細かいアドバイスがポイントだという。

「オランダではバブリカのアザミウマ対策として幼虫にAmblyseius cucumeris（ククメリスカブリダニ）を1〜2週間に最低100匹/㎡、成虫にはOrius laevigatus（ヒメハナカメムシ）を2〜4週間に毎週最低0.5バグ/㎡というふうな状況によって綿密にアドバイスしている。また、花粉をベースにした天敵昆虫用の餌であるNutrimiteはスワルスキーやミヤコカブリダニ、タバコカスミカメ用に開発したもので、ハウス内で散布すると天敵昆虫の密度をあらかじめ高めるとともにその

増殖を促せる。注目度は高い」
両社とも、天敵昆虫の普及には状況に応じたきめ細かいアドバイスがカギだと語った。



天敵昆虫の餌であるNutrimite



biobest社のブースには日本のマキタ社のハンドスプレーが置いてあった